

## 審査結果の要旨

氏名 伊多波 宗周

本論文は、ブルードン思想を、秩序、とりわけ社会的秩序と政治的秩序に関する思考として捉え、その意義を解明したものである。「オルタナティブの思想」として捉えられてきたブルードンの思索が、秩序という問題を解明する中で、様々な問題群と向き合うことによって内在的な展開を遂げ、思索の過程そのものが独自の秩序の哲学に結実していることを解明した点に本論文の独自性がある。

序章において、先行研究を概観し、疎外論の枠組みの中でブルードン思想を理解することへの疑義を提示した上で、本論文の基本的問題設定を簡単に示した後、ブルードン思想を前後期思想に区分して論じることの正当性を示し、論文全体の構成を述べる。

第一章は、最初の主著『所有とは何か』における秩序論の成り立ちを解明する。まず、「あるべき秩序」と「現実の秩序」に関するブルードンの議論を峻別することの必要性を確認した上で、両者を独自の仕方結びつけるブルードンの方法を解明する。次いで、「あるべき秩序」がアナルシーであるという主張に至った理由を原理的に考察する。ブルードンのいう「正義」の原理は「所有」の原理と対立し、内的な原理を有し、自律的な「社会」の原理である。「正義」の内実である「平等」の原理に支えられたあるべき「社会」の像こそが、アナルシーである。他方、「現実の秩序」において、「所有」の原理と「平等」の原理との相克によって政治的秩序と社会的秩序の対立が生じている。そこで、「現実の秩序」の中に見出された社会的秩序の萌芽が「あるべき秩序」としてのアナルシーへといかに変化するかということを中心に、秩序の変化についての議論を見ることになる。

第二章と第三章は、前期思想の残りの期間における、秩序の変化の問題の処理を検討する。第二章では、『人類における秩序の創造』および『経済的諸矛盾の体系』における、「分業」や「競争」等が「現実の秩序」の中で矛盾として存在しているという議論を紹介する。第三章では、アナルシスムの完成形態を提示する『革命の理念』における「政治的秩序の社会的秩序への解消」の議論の形成を検討する。「現実の秩序」は政治的秩序における「力」とより包括的な「社会的な力」との対立とされ、「力」同士の対立であるがゆえに、「社会的な力」の方に従って秩序を形成すればあるべき秩序としてのアナルシーになる。次いで、初期においては好意的に見られていたアソシアシオンが、外的なもの働きを必要とする以上「社会的な力」の一つには数え上げられず、「友愛」「連帯」といった原理と共に徹底的に批判されていることを確認する。この批判は権威の原理に基づく政府の批判につながり、ルソー批判において、政治性なき社会的秩序の不可能性が問題として浮上する。

第四章では、以上の問いに導かれてブルードンが後期思想に至って、政治的秩序に積極的価値を認めた上で、連合主義の立場に移行したことを示す。『連合の原理』における政治的秩序の議論に見られるのは、『革命の理念』で否定された政治における「権威」の原理が、個人の「自由」の原理に先立つという論点である。次いで、『革命と教会における正義』において、アナルシスムを捨て去る内在的理由を明らかにする。トクヴィルの議論と対照させることで浮上するのは、社会的秩序における「正義」が政治的秩序にも適用可能であるという議論である。さらに、最晩年の『労働者階級の政治的能力』において、労働者階級が集合的理性に与ることによって秩序を変化させていくことの可能性を示していることを明らかにする。以上から、後期の著作が前期思想の問題点の解決として書かれているという結論を得る。

このように、本論文は、社会的秩序と政治的秩序の成立に関する錯綜した議論を分析し、ブルードン思想の展開過程を内在的に解明することを通して、その哲学的意味を明らかにした独創的な研究である。その細やかなテキスト解釈は、個々の理説の内在的な展開の意義を鮮やかに浮かび上がらせるものである。他面、社会的なものや政治的なものに関する現代的議論との応接が足りない点、トクヴィルに関する議論など二次文献にやや頼りすぎな点、前後期思想の区分に関する方法論が不明確である点など、もの足りなさはある。とはいえ本論文は、ブルードン研究に新たな寄与をなすものにして、社会的秩序と政治的秩序に関して多くの反省を促す重要な研究である。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。